

農家益

番外書冊

			二	和
		一	四	書
		〇	六	門
五	四	六	九	
冊	架	函	號	類

庫文閣内			
一	二	和	
三	四	書	
函	六		
	九		
六	冊		
架			
内閣文庫			
番號	和	24699	
冊數		5 ( 1 )	
函號		183	239

農業 一五

183-239



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

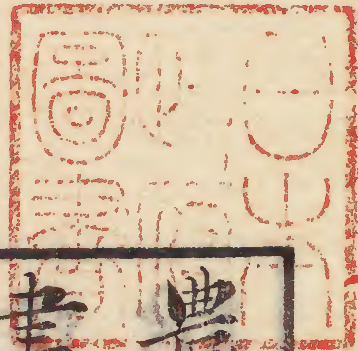
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak







農家益叙

淺草文庫

書曰民惟邦本本固邦寧蓋  
民有士農工商之四農最為之  
先而其貧勞亦莫如農者是  
以近世農變為工商者往往  
有之該取謂以貧求富農



不如工、不如商、無他以其貧  
勞也有一於此小縣之以令免  
其苦則非亦助治教之萬一  
耶蓋聞近年關西諸州之  
民於農隙植黃蠶於曠野  
陂隄採其子或製黃蠟而送

都下得其利者不可勝數而幾  
內關東諸州亦間雖有之而  
未達其術故一旦雖作之半  
途而廢者多焉豐後人大  
藏氏永常者頃者寓於浪  
善一日推其所著書來而



示余、ケニスニ閱之則載黃樞種樹  
 之法及製方之事、ヲ畫圖以審  
 之、ヲ其術可謂勤矣、余乃以爲  
 此書大有益於利民、固邦於  
 是、ニトヒカル咨之池田縣令、ニ甚善之  
 曰、使部下民見此書、則其道

倍進焉、子其勸而梓之、於是  
 乎、勸永常梓之、欲令部下及  
 諸州之民、ヲ普知斯術、而各務  
 其業、至於本固邦益安、因題  
 曰農家益庶、ハクハ乎、閱此書者、竭  
 力求之、則有達其道矣、余



盡於作者之志專在於利  
民因忘固陋聊述其辭以  
塵卷首云  
享和壬戌仲冬

縣令掾奧野秀辰謹誌



農家益後序

天地之宏彼采葛為絺伐楮作紙與  
夫煮海為塩蒸穀作酒等皆以給於  
民先賢之功不可並廢矣故後世苟  
有可以利民生者則細碎不舍焉嘗  
聞近關右之民采黃檀子以製蠟其  
色雖微異其用全同以是得其利者  
不鮮矣於是國侯縣令多命而植之

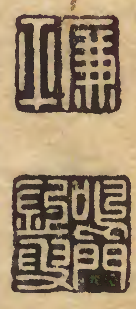


然未熟其事或不免寶山空手之譏也。豐後大藏永常者有慨乎斯累年深思遂得其術著為一書黃檀栽培之事至於取子製蠟之法莫悉不備焉。蓋其志專在乎利民生則其功亦不可以廢矣。於是乎將梓之以傳於天下後世乃因縣令掾奧野子需予附一語予固雖不知其事然已見其

書則其事可概焉。意雖非荒政急務然其利民生之功與夫葛締楮紙不<sub>レ</sub><sub>レ</sub>不可並廢者哉。烏乎讀此書者竭思以得其術則必為其家之錢樹耳。因題數辭以塞責云。

享和壬戌年仲冬至日

南阿荒井公廉題於浪華蠖屈軒





Faint, mostly illegible handwritten text within a rectangular border on the right page.

農家益自叙

荒田を耕者水を枯て湯圃ふ培者ら

旱乾を免はら損益消長は常なり夫

本報は上古

大日靈子の御傳より東作南

風の道賢を以て御教を奉るは







義賢よ計つてく様うあは蓋常よりき  
 ち言と取香山の老僧が徳と務り  
 搬しとくを老圃買之徳得せば  
 大幸もしんとふ云

享和二年後月 大倉水書誌

大倉水書誌

農家益天の巻

風唱の満麟歎野は繁に恭平は神代は禮堂文  
 武の備りてはかく農工樵商乃樂まざるは  
 夫河甲海鱗の水に任んあそとくは照付は民を  
 おふけれに恵の大がはと女と金是福者なり牙  
 の富は絶ぶるがごとく凡庸の下民を恒小眼よ邊る  
 くら日月星辰の日欲東より出て西よ徒とす







出竹くし用半とも烟くわごと放つるゆくと先  
 社稷の宗社かどく朱氏日社稲荷の沖神よ請け  
 深きれ里とさ夏の藪乃弓矢改所の宝前願とせり  
 伏見の株くまねけまへ桃とて式後源も勝て  
 て信北の桃樹と植てとて滋桃の吉野くも云と處  
 かりくらひく梅樹のこ植て桃へ嫁くそ名のと  
 妹より情のひさば我一生のくら僅にす百れ今  
 追須更の問は伏見桃とて都鄙くそ一季まは



暎日の美景都下冠たりと梅樹藝者一骨  
 氷肌満る飯くじ清土の大原嶺を欺くねるを  
 見中とへ京師乃人家敷十方家又明の田録よつれ燒美  
 せし一紀とつて次悉く新家清整と建並びしと  
 必竟を来れね候かどかちと天かしくゆくと礎  
 たる小氏とつても已くが縁牆の道よもぬくんと  
 用ひとちとあく人味よ今を来れ神代よけしとに徳ふ  
 俗一奉て以路を車馬自中ふは海波移之りて死



かきで竹とら慈ざんやんたしうふとや船場よ  
 此より京橋とらより舟よきて大坂下つらぬ世乃  
 たしよもいさるあや常念舟のたしひては津津  
 のま日向の炭賣播磨れ改懶を長らけりやま  
 此のうらみくに處法則は西月橋とら券をば飛雲  
 河のくはい(うら)と海月れ勝系と身まかしく年  
 のそらうらに中懐をまけ及水國筋より出ね奥明を  
 巡て実東筋有坊よ見物しつにじうばとみ禁が住

先りくふわと豊鏡なる方とて一揃必のし海田  
 此の着物をま比相夜よ城後編か変作考改進は晒  
 布播磨河内本綿上野下野の絹つらも益太  
 といども元皆京感のう撥物の垣けつと丹後京房  
 などの撰写よりてみか人を費せし物名録寡孤獨と  
 技る大益者ふらうと天正湯うらとに彼ゆらと是  
 先りの藝がたよとわ原月ら京師西陣ハ救災  
 此よりつら杖巻は河とこれよ差してと産とらと物



天工有人工有つて作小博多織本綿よ小倉布よ  
 薩摩上布有紅花有綿有客相之後河紀洋よも  
 勝つし漁意之天下よ冠つり糸較之庭訓は未よ紙  
 虫の糸と稱てよしたんよ國府の糸糸と産次  
 糸糸投意よいよなわし次し雲よよ七中熟して  
 尖糸ららる哉月の糸糸と思ゆらる昔く日之刻よ  
 糸糸のいよらるしをも極たん去がらる已と判らる  
 半よのよと人よて地の益大が次上布博多織を

着せぬ人よ者よと奈に晒け日本綿と服せぬ人よ  
 糸糸か一板よ交易大し七無工よ糸糸を好自  
 此糸糸を好らるしよ糸糸のいよらるしは貴物よ貴  
 乃人の用いぬ糸糸といよし濃服よ多用いられど又  
 髪は服よかり次これ用と初めて解とつとれ文と  
 親ひて質よ味く流るよ西の國は果かよハ美と也  
 糸糸一実にはとれ清と性質よと一かよと之は  
 能はれ人勅然とて云く糸と教導國と保ん



とつと郡守以上は沙半よりといふを農氏の  
海より交がりんや林式の者ハ造次顛沛す  
ら法擬と守りまうて自己に専務けんを代  
殺とののわんや故に我あづふ方の農氏のを  
高のくんと常と改とね水緑れ頂小綿の種子和  
舶来せしよと氏益大かつしつと後成内と湯の法  
國のしり植て九州に存紀よかりしより極の突  
とつとまとは和しと延寶元緑の頂る酒あり

その後或國の家臣某大に榎の樹と植る米と國  
中よ布紙らししつと英大に金出米ことを  
極方根と植らと除はの深波北常の夫食と宛  
たてて國君は法福下氏の幸とつと益國中よ  
富つと似しつと九國中の諸州極と植る國は  
今つとをををををををををををををををを  
植たまはと國氏寫せ改とれ利の遅速よつと極美金と  
添つと左かり極つと裁同諸州のつとは之都



を以て農家も自高貴を憚りて假初も利の度  
 々んと或は或は左耘耕の道もいらしく勿論耕の  
 粉骨碎身しうしと出作る所せんしと欲とこれ  
 業よ身を委ねり生厚れを羨慕とて下一葉茂れふ  
 方よごりたれし有田家よかた田作し世の介が  
 老人あり毎年より諸家よほ之或は浪介て諸  
 國と經歷し廣く母牛と知する男常にいふあり  
 身かどて下人の耕作より自分と農事と考計

てあことりばせれ物も有り年頃も別けごと  
 農業よ於く好まゆりしと地頭もまはれどその  
 小れ長長これと或人と我來地のうら跡よ悪田を  
 撰りて波さしれ元との谷全極りて姓氏の考に  
 亦此これ水有てうかけれはほいほい代らといふ悪田を  
 うけなてほくく見てを向れ一方に深さにて尺斗  
 の大溝とわたり波要水と為しを流さしひくを  
 とうらに云申りよけりし于田しかりし月雨よ



苗を植りて小年久し水田と云々晒してて  
 陽気と云々をわけててさうして是を多くして  
 今より五斗ほど秋を熟して八俵の米と云々  
 田舎小農人作てて十分世の中といふ  
 所之依出あはして希代の満作とて收る要田なり  
 ともや又小身か付侍ふれと里に住ける下人の  
 深あはしてとて一田畠をほくせりて城中小  
 有るふれりてより見舞とて下人の酒者を

乃乃とてさうしてはるは折よこを築きとて  
 使の男と目とて免田入りて米を刈りて  
 乙申れ米多と云々はゆいれをを販賣りて  
 かねてとて刈りてとて田入りてはるを  
 苗を種りてとて大と云々をびりて入依を  
 け田とてはるを臥後出来ぬとて收びりて要田なり  
 うや都らぬゆいをよくとてぬいりてとて入敷  
 本もよと能果へみのゆよ相違とて一譲りて農



家此費とる作は有しく分限不相致れり此ハ  
 彼理屈にんして実のつるは故よは冷の遅速  
 去比の厚薄を考へ穀種の多勢は菓樹は緩  
 益と糸あはも穀の害有比は日本茶楮桑漆之糸  
 と植極ふし成種うと可かろべし麻綿藍農業全書と  
 云書物の出来し頃ハ極の本と種うとを知ら  
 ざりしはけ一程を書りしやうよしして不色の樹よ  
 りやと惑つる農家もまじりし哉内すの氏田魚い

此と終ひ真海の濃を備力の乏しと若しむと  
 見へりこれら松耕培養の道ととととと  
 ころ及れ境なくしととととととととととと  
 此といへりこれら此ととととととととととと  
 や電光石火の如く出る息の入りもまた世乃  
 中より何ぞ百年の没とわや漏宿の糧がふ有と  
 一より一より天無深の人と生でば世用の物を産せ  
 ども争がほりたるわの國を廣く六十方石南不



方武百里の古道を 若野山有て以用満ら旧好乃  
國として自大より國がまを食送り以比質定  
きると別これ天の命せは幸福なり彼やいんを人  
カと以天の賜と捕せんや統は空野のいよくそ件  
乃いへり之耕さば賈うん人の天の命をさす也  
を食斗掖の厚屠公の改なりは氏より月と勃  
耕工高て俱一技或助念て有用と融通次これと  
世業として人の恒の道なりいひてふ天の道

天ノ  
受  
和  
園  
藏

かごと 齟齬一 懶惰かり 恒乃 壽なり 者と 天比乃  
飛人かり ぐと 孟子曰 氏の ぬき 恒の 産む 者之  
恒の 象一と 按と ば 恒の ぬき 者ハ 恒と ば ば  
と 盗なり 財貨と 盗のこと 云う 彼 勃と 盗と 年  
と 盗を 業を 盗む 者 恒の ぬか 者 かり ぐと ば  
樹下 石上の 出家 境果 ぬき 恒 古より 恒や 成者  
夫より 有て 斗ら たり 者 とも や 蓋 國 富り 徒  
よ 光法と 盗む 恒の 産む 徒と 云う ぐと ば

天ノ  
受  
和  
園  
藏



えより貴國と云ふは故に同は扱とすべしとす  
通商貿易と云ふは海船の来往を此の脚の交易  
の後はるるの如く及通商の文書のとて以て半  
とするは此の國といふも却て半は扱とすべし  
先産物のふらととりて是より素に晒の如きも  
經くとすは是の如く和州とて紡糸も緯の織物も  
石晒布の如くは質が播磨とすは國中は綿と云  
ふも去るは是の如く凡そ十年には方結好と云ふは

と云ふも昨今年と云ふは是の如く是令化して綿  
と云ふも是の如く是の如くは後代國の穀産綿と云  
ふは是の如く是の如く是の如く是の如く是の如く  
と云ふも有用穀田と云ふは是の如く是の如く是の如く  
朽は國富りたる如く是の如く是の如く是の如く是の如く  
陶器と云ふは是の如く是の如く是の如く是の如く是の如く  
明熱と云ふは是の如く是の如く是の如く是の如く是の如く  
國用と云ふは是の如く是の如く是の如く是の如く是の如く



より極端と授てそ益の偉かり申我内國東り  
 似るものありしもの大和の甲州と大和して  
 けとどき米りては世比頭より極し申ん極  
 けし今せしめて程の縁に植たりしに唯つら  
 一本而已然つて実しいつものを見似新秋と紅葉  
 して色すけとを果とゆふ人れは折ぐはは  
 牛馬よそつらつて林果ぬと極のふれ落はけ  
 乳をくてもなるの穀物はおよより可成といふ

梅の小菓樹弟本よ土圪お授う恐有き國の相類  
 雷國れ竹ふさりしごり處なり丹波栗大和抄  
 くの梨は極葡萄かどり約し菰茎の甲れ云をれ  
 一隅と傷てと隅とれらるる僻海と云べしそれ家乃  
 氷菜大坂れ交らるる毎の臭味と去比ようのてかり処か  
 じしとも又茶と麦との圃と撰らるる類して極を  
 処とありすはけをそ本たりしそれ極の本は益と  
 いふを秋とぬ日く續ぐ人果れ大菓して菓樹は徒



五十二 皇朝 國書

よに腹と暮りては其用の用たるは元来蠟ハ清土  
の七も蜂蜜の滓とて製せし物ハ蠟と云字ハ  
虫篇ニ属せしと云て知る處ハ真なる物と蜜  
蠟と云は清なり後世偽を以て蠟を制しし  
極と以制しと力の至工を助くし清くし柞極の  
蠟と制しと初を制しとて延寶の以薩州極治  
川村といへり其清土船来の極は實と極と蠟と制  
せしよると次才は九州は以清しし元文の頃より清

以清ししと云てをねせし中初は清土  
自然生の後多く有ほどもがれ其子と益有  
物とも是極はいふは物とのと製して清  
其本たるしと云ふは清しかり今世極の清し七  
其ありしと云ては清と云ふは清しと云ふは清し  
絲と云ふは清土の極島の小川村は清しかりかく  
次才清しし物と云ふは清しかり今世極の清し七  
管身并極の清しして元文其身は清しかりと

五十三 皇朝 國書



云だ<sup>うぐさひ</sup>り<sup>を</sup>ま<sup>れ</sup>道<sup>り</sup>の<sup>し</sup>作<sup>り</sup>け<sup>れ</sup>あ<sup>ひ</sup>樹<sup>下</sup>石<sup>上</sup>  
 の<sup>は</sup>種<sup>子</sup>り<sup>ら</sup>れ<sup>る</sup>を<sup>も</sup>つ<sup>て</sup>人<sup>や</sup>古<sup>め</sup>の<sup>國</sup>道<sup>有</sup>は  
 食<sup>ふ</sup>れ<sup>ら</sup>す<sup>の</sup>妙<sup>か</sup>つ<sup>て</sup>農<sup>民</sup>さ<sup>し</sup>と<sup>致</sup>や<sup>連</sup>致<sup>す</sup>か  
 少<sup>く</sup>め<sup>の</sup>そ<sup>ご</sup>う<sup>盡</sup>で<sup>計</sup>者<sup>人</sup>有<sup>ら</sup>る<sup>を</sup>使<sup>は</sup>す  
 有<sup>ら</sup>し<sup>い</sup>へ<sup>ら</sup>せ<sup>ぐ</sup>ん<sup>や</sup>乃<sup>至</sup>菓<sup>樹</sup>へ<sup>も</sup>致<sup>す</sup>害<sup>の</sup>  
 ろ<sup>く</sup>移<sup>ら</sup>る<sup>を</sup>は<sup>ら</sup>ぬ<sup>は</sup>條<sup>措</sup>法<sup>に</sup>よ<sup>り</sup>て<sup>裁</sup>制<sup>せ</sup>ば<sup>し</sup>  
 う<sup>く</sup>人<sup>力</sup>と<sup>費</sup>と<sup>一</sup>只<sup>下</sup>此<sup>國</sup>之<sup>も</sup>極<sup>と</sup>植<sup>殖</sup>  
 ら<sup>う</sup>と<sup>思</sup>は<sup>る</sup>は<sup>悉</sup>皆<sup>法</sup>に<sup>疎</sup>し<sup>と</sup>是<sup>て</sup>雄<sup>樹</sup>雌<sup>本</sup>

の<sup>差</sup>別<sup>は</sup>夫<sup>女</sup>本<sup>と</sup>実<sup>と</sup>種<sup>の</sup>男<sup>本</sup>と<sup>実</sup>と<sup>一</sup>む  
 雄<sup>本</sup>の<sup>老</sup>と<sup>雌</sup>本<sup>と</sup>接<sup>ぐ</sup>し<sup>て</sup>牙<sup>孔</sup>の<sup>際</sup>か<sup>り</sup>又<sup>二</sup>十  
 ケ<sup>年</sup>毎<sup>と</sup>接<sup>し</sup>老<sup>本</sup>れ<sup>実</sup>の<sup>り</sup>と<sup>え</sup>の<sup>と</sup>伐<sup>ち</sup>  
 救<sup>枝</sup>の<sup>接</sup>み<sup>し</sup>あ<sup>り</sup>し<sup>と</sup>年<sup>毎</sup>接<sup>し</sup>て<sup>は</sup>れ<sup>ら</sup>る<sup>く</sup>  
 実<sup>の</sup>物<sup>と</sup>式<sup>之</sup>百<sup>斤</sup>を<sup>切</sup>り<sup>し</sup>杯<sup>種</sup>子<sup>と</sup>存<sup>せ</sup>ら<sup>る</sup>  
 田<sup>原</sup>よ<sup>り</sup>種<sup>を</sup>並<sup>く</sup>は<sup>ら</sup>す<sup>は</sup>有<sup>ら</sup>る<sup>樹</sup>移<sup>植</sup>の<sup>速</sup>速<sup>と</sup>接<sup>ぐ</sup>  
 け<sup>し</sup>有<sup>ら</sup>る<sup>の</sup>種<sup>あり</sup>是<sup>初</sup>生<sup>れ</sup>種<sup>足</sup>の<sup>乳</sup>養<sup>と</sup>て<sup>實</sup>の  
 如<sup>く</sup>今<sup>後</sup>の<sup>老</sup>圃<sup>を</sup>切<sup>り</sup>て<sup>倫</sup>ら<sup>る</sup>産<sup>婦</sup>連<sup>綿</sup>  
 〇(天十四)愛和園載



天十四 受科 園 榎

そは長堤は布裁らるるが益れ大なる事  
だるは極樹に七種の以有裁るは法は極方あり  
いさふ等用がよりんや花漢書云穀物を  
移るのへ一移ふのさうがはと也これハ凶年よ  
余ても穀物を以て色けど麦熟後とも油菜能  
し有米能く本端不利なはし有藍菜  
麻紅菜の類之類は本末小を利とりたる  
史記の貨殖傳といふる金植する事と書

又安邑子株の事燕秦の粟陳夏の漆并膏  
の桑麻渭川竹竹富子戸娘も等して一國  
一郡の比頭に分限もはるる富がうと記せり  
唯然なくと裁内れ人れハ利とありんを欲ぐ  
いふ富がうも頭く食うなりも速ふる事う  
極の本れそ渭河植立徳用有條の積たの

一極樹を万  
但近年月植見せしそ  
六年月より八九年より十の余生

天十五 受科 園 榎



天正五年  
御  
御  
御

八九年月より既よ未此下吾相分て三十三斤  
物も省又十斤より出たも有これを

平泊一肉す小様りて又斤宛たり積たり

五年目より七年月止止せたり

入用雜費りて内たり  
物ら度目百二斤あり

一五年月二万斤  
但る分にて所れ積りたり  
代浪分と云ふ

代浪六也月

一八年月五万斤  
是より得用と見たり

代浪拾也月

一十年月 拾五万斤

代浪二拾也月

一十二年月 二拾五万斤

代浪七拾也月

一十五年月 六十万斤

代浪百也月

右々額志有増内徳の横たり  
享和元年西に

享和元年西に



天正十一年 受和園藏

大坂着極実茂物納屋物凡百万也月録之 漢改極  
より舟式トより式トを屋屋と日向極を舟式  
式ト八九生匠なり一り一と大坂換回屋とたぶ孫  
孫より凡を万本の積かたれ一西國或度家  
を世屋極と植移ひ十年満る内百万株  
も及びかんも是裁れ自代の量ぞや然も  
領とかな思方近所古事し一も山つ次その  
沙家の長屋園谷氏とや承傳一方の發記と也

又主藤國は吏人二十之止極裁方法外有  
て年々植増より承傳より後六より大  
差の晩成とやゆはは此極の實も裁て又年  
月より漸有しく利を培りのかんたかしく  
幸托せざる盛長せば實に孰後の國生兼郡大  
野原とつる取之方式折所の園とて満る松樹  
むよりかつてつる黒に又若と云る百姓の者一が  
比頭ノ預人中大野原れ松の沙屋も若くして

大坂着極実茂物納屋物







天正十一年  
新編  
國書

山家の荒列年にも材一と臥天ごり此切株とが  
目的よりあつて成して満山と極をせり此者  
ハ思ふまじふけりりともハ極よ極苗と植一が  
古今不双よ盤後一りりこれハ松の根と極ごりふ  
せんとして荒列年去尖淋露の浦とていして山中  
之に尺程死地極や一左土之食よくかえ来地味能  
周ハ七風とれよく盛本せり今又者自己の才  
是とん之松不朽の量と斗石体の幸と負氏に

多山より地頭より厚く獲英志終つて  
丈極の清くよ育つた胡椒の平釣は極ハ和漢の  
満なく米麦の極物にして天下の美本なり  
近ハ縮綿立花廻入道參かどて新栽は流り  
主價百箇の今も今も争借方す此就極とて入り  
いへや丘陵原野に於てやいふは見えりて  
大木を空しとて油の天敵は松  
の良材たるも伐てハ古株葉とせざん樹は益樹も

天正十一年  
受口園茂



百歳と云ふは用と云ふは極の古株の新芽の接  
 新樹の五年よりして実生る良田ふこしと栽く  
 本れ栽らば何回も畠に利と是極樹盛太り  
 かうその樹下此畠に存養の益もぬかりを  
 とれ石朽の福おびやと鼻うぶはう罵る  
 船中此後客然しては我より一が玄葉と抄て  
 いそく是刻より貴きれはゆふふいば是も歌  
 一も水田白とげり水作しが竹根と接を

天十一年  
 愛新閣  
 龍

栽ては自化の益となり樹よりして幸云と云うは  
 候容易よ首ひゆては道なりや但一傳一承  
 だれやと問ふとんいんやと此業なり委傳  
 糸とせんといふるふくや舟はははをさ長物  
 いつう後のからひ乃いとがぶまばいんもせん  
 とぶら一実よ平が同ての大蔵氏ふりたのこ苗は  
 大坂に住たり元来古柳よ有しとれは類族乃  
 極と栽極端と後とを扶てり則ち左極に栽

天二十一年  
 愛新閣  
 龍







